

ゾウの調教を始めて

飼育展示担当 鈴木 修

去年の4月からゾウの飼育担当になりました。見習い期間中は、監視役も務めながら先輩達が調教を行うのを後ろで見ていたのが日課でした。ゾウの調教は、人間の号令に従わせることにより、体をチェックして健康管理することを目的としています。見習い期間を終え、ようやく調教を始めることになりました。ゾウはとても頭が良い動物。まずはゾウに担当者だと認めてもらわなければなりません。少しずつエサを与えていき、顔や声を覚えてもらいます。

初めてゾウの前に立った日、その巨大さと威圧感に足がすくみ、正直恐怖すら感じました。これが地球最大の陸生動物アフリカゾウか。いつも遠くから見るゾウは穏やかで、優しい目をしていますが、その日だけは違う生物を目の前にしているようでした。この話を先輩達にすると、「誰でも最初は怖さを感じる。その気持ちを忘れずにゾウと接すること。でも馴れ合いは禁物。そして、凛とした態度でゾウに従わせること。おどおどしてはゾウは言うことを聞いてくれない。」と教わりました。今では雌の花子の調教を1人でも出来るようになり、日々の健康管理を行っています。

まだまだ若い2頭のゾウを大切に育てていきたいと思います。



花子の調教風景

動物病院から

マーコールの蹄の治療

飼育展示担当(獣医師) 安永 千秋



大きな角が特徴のマーコールのオス



ハサミを使つての削蹄の様子



腐った部分(○の部分)をきれいに取り除きます。

マーコールは野生のヤギの仲間、オスにはらせん状に伸びた大きな角が生えています。

当園では、去年2頭の子供が生まれ、さらに他の動物園からメスが1頭仲間入りし、現在はオス1頭とメス4頭の計5頭を飼育しています。

ある日のこと、オスのマーコールの歩き方がおかしくなっていました。そこで、麻酔をかけて調べてみると、蹄が伸びすぎていて、さらに一部が腐ったような状態になっていました。これでは痛くて歩き方がおかしくなるのも当然です。蹄の伸びた部分を切り、腐った部分もきれいに取り除いて消毒しました。それからしばらくすると、今度はメスのマーコールも歩き方がおかしくなっているのに気づきました。捕まえて調べてみると、オスと同じような蹄の状態になっていました。そんな状態が全頭に繰り返し現れるようになりました。

野生では標高の高い山岳地帯の岩山などで暮らしているマーコールにとって、動物園の展示場のような土の地面だと、蹄が伸びすぎてしまい、病気につながってしまうのです。一部に砂利を敷いてみたものの、あまり効果はありませんでした。自然に近い環境に変えてあげるのが一番なのでしょうが、すぐにできることではありません。しばらくは定期的に捕まえて、蹄の治療を地道に続けるしかないようです。